
春宮ヒスズの憂鬱

中毒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

春宮ヒスズの憂鬱

【Nコード】

N7099H

【作者名】

中毒

【あらすじ】

『涼宮ハルヒの憂鬱』に憧れた馬鹿が世界を変えてしまった物語。

プロローグ（前書き）

この小説は重度のハルヒ厨が自分の欲望を小説っぽく書いただけの物語です。過度な期待はしないでください。

プロローグ

サentakクロースをいつまで信じていたかなんてのは、たわいもない世間話にもならないどうでもいい話だが、それでも俺がいつまでサentakクロースを信じていたかと言うと、俺は確信を持って言えるが最初から信じてなどいなかった。

その他の宇宙人、未来人、異世界人、超能力者も同様にだ。

しかし、受験が終わった後、どうも家でくつろぐ気にはなれなかった俺は、近所の本屋をブラブラしていた時、見つけた。

『涼宮ハルヒの憂鬱』を。

これを読んだ俺は非常に感銘を受け、宇宙人、未来人、超能力者の存在に憧れたのさ。

そして一ヶ月の間、俺は中二病患者になり、市内を無意味に歩き回ったり、図書館でUFO等の文献を漁ったりしてたわけだ。

しかし、現実つてのは意外に厳しい。世界の物理法則がよくできていることに感心しつつ、やっと宇宙人（以下略）は存在しないと理解し、リアリストに戻ったわけだ。

こうして俺も高校生となり、最初の挨拶で『ただの人間には』を言ったらどうなるかと妄想……もとい、シチュエーションをしながらも普通の挨拶を済ました。

微妙な緊張から解放されたと同時に、俺は初めてそいつに出会った。

「西中出身、春宮翡鈴、ただの人間には興味ありません。
もしこの中に、妖怪、地底人、異世界人、魔法使いがいたら私のと
ころに来なさい、以上。」

「……………マジかよ」

こうして俺の高校生活は始まった。いや、始まってしまった、始ま
ってしまっただ。

この時はまさかこいつに関わることになるとは思いませんでした。
わかっていたなら回避するなりできたんだが…。
まあ仕方ないことか…。

主人公 1（前書き）

ユニークってなんぞ？誰か教えてくんろ

主人公 1

翌日、涼宮ハルヒもどきの登場はかなり学年を騒がせ、春宮翡鈴は早くも有名人となった。

興味を持って話かけたやつらがいたが、普通の人間とわかるが否や「話しかけないで」だのなんだの言いやがるらしい。ま、春宮は置いておいておくか。

俺は数名の友人を作り、ふつつーの高校生活をおくっている。ある日のことこんな会話があった…

「悪いことは言わん、春宮翡鈴には近寄るな」

と、違う学校から進学してきた初の友人の白石が言った。

「誰が近づきたいって言ったんだ？」

「言ってるけどよ。お前が春宮を狙う前に忠告してやってるだけだ」

「あんな変人を狙うバカがいんのか？」

「中学時代はかなりいたな。あいつかなりモテるんだぜ？なんせ面が良いからよ」

俺は横にある窓を開け、プールを眺めながら話を聞いていた。

「中2の二学期半ばまでは才色兼備のスーパーお嬢様で男子生徒の人気を総なめだったんだ」

最初はボーっとして気づかなかったが、プールサイドには春宮が立って校舎を眺めている。なにがしたいんだ？

「けどな、ある日から校内で異変が起こりはじめたんだ」

春宮と目があった気がした。すると春宮は満足そうに踵を返してプールサイドを後にした。

「校庭への落書き、お札がめちゃくちゃ貼ってあったり、机を全部教室の外に出したりもしていたな……」

あいつはなにがしたかったんだろうか？

まあ考えてもわかるはずがないからスルーするか。

「あれ？

それって聞いたことあるよ？」

今の発言は、唯一同じ中学から来た友人の木田の台詞だ。俺はこいつがいなかったら実質一人の高校生活をおくっていただろう。白石だって元よりこいつの友人だったからな。

「そりゃそうだろうよ

春宮は『涼宮ハルヒの憂鬱』に書いてある通りのことをリアルに実行したんだからな」

「へえ」。それまたなんで？」

「俺が知るわけないだろ？」

憧れたって見方が一番多かったな。宇宙人や未来人や超能力者に。俺は気になって『涼宮ハルヒの憂鬱』を読んだんだ

だが、あれは学園ものかと思ってたらファンタジーだったんだぜ？いくら春宮の頭のネジが緩くても本気で憧れるほどのバカじゃないだろ？

だから結論は謎に包まれたまま、本人のみぞ知るってやつだ」

白石の話の後半に春宮が教室に帰ってきた。まさか聞かれてはしないよな…。

そろそろ休憩も終わりか…。何故時計を見ずにこんなことがわかったかって？春宮は授業5分前には必ず返ってきてるんだ。

さて、次は体育だったっけ？

……………ん？体育？

一瞬、嫌な予感が頭を駆け抜けた。まさか…………いや、それはないだろ…と思いながらも春宮を見た。

やはり予想通り男子生徒の前で惜しみもなく服を脱ぎはじめた。

鬼のような形相のクラスの女子に男子が皆追い出される。

気のせいかやつの頬が微妙に赤く染まっていた気がしたのだが…。

よく見ていればわかったかもしれないが、不覚にも俺の視線は別のところに向かっていた。うん、なかなかグラマーだった。

「な？見ただろ？あいつの奇人ぶりを。

ちなみにあいつが毎日髪型を変えるのも涼宮ハルヒの影響だ。俺は髪型見るだけで曜日がすぐわかるぐらいになっちまった。

この後に起こることを教えておいてやるよ
やつは次に髪を切る。そして文芸部を乗っ取る」

元より俺は知ってるが、まあ隠れオタクってやつだから黙っておこう。

主人公 2

しばらくして、ホントに髪を切って投稿している春宮を見ることになった。

席が前の俺はなにか指摘しないといけないのか悩みながらも、魔がさしてしまったのか、不覚にも声をかけてしまった。それに髪を切ったってことは誰かが指摘したに違いない。キョンのポジションはもう埋まっているんだ。

「誰が髪形について話をしたんだ？」

「……………あんたが最初」

「いや、髪切る前の話なんだけど…」

「切る前に指摘してきたやつらはめちゃくちやいたわ」

「んで、その中で誰をキヨンにしたんだ？」

「考え中、皆たいしてアタシを見ていないのに髪について言ってくるの！」

「どう思う！？」

「さあな？お前に気があるんじゃないか？」

なんとなくらしくないことを言ってみた。
案の定春宮は…

「馬鹿じゃないの!？」

と言いつつばを向いてしまった。ここで始業のチャイムがなり、俺は前を向いた。よし、これで俺はキヨンの座につくことはないな。と、思っていた。が、授業が終わった後…

今思えば、この時はじめて会話が成立したんだな。

「皆！注目！」

終わりのチャイムになるやいなやすぐに立ち上がり叫ぶ春宮

「今、このクラスからキヨンを選出するわ
なりたいやつらは挙手しなさい！」

と言いつつやがった。

教科担任と皆がぼーんと見ているなか

「いるの？いないの？」

時間の無駄だから早く挙げなさい！」

春宮の声だけが教室内に響く。

何人かの男子はおもしろいがって手をあげ始めた。やっぱり春宮は見た目が良いからな。お近づきになりたいんだろつよ。

そのうち結構な数の男子が手を挙げていた。

俺？俺は挙げていない。なかなか魅力的だとは思うが、一時の気の迷いで面倒をしい込む俺ではない。

「以上なの？」

じゃあ今手をあげるやつらは不合格」

手を挙げている男子を見回すとこんなこと言いやがった。

おいおい、最初から教えてくれよ。もしわかってたなら意地でも手をあげたのに……

「残った男子の中からアタシがキヨンを決めます

……… あんた、あんたがキヨンよ。拒否権はないから」

と春宮は指を指したのは………俺だった。

いやいや気のせいだと思い、指の向いてる方向からズレてみたが、指が俺をホーミングしている。ステルス機能で対抗したいところだが、あいにく俺はそんな高性能じゃない。

「…………断r

「ダメ！！！」

と言う分けて、ゴールデンウィークも過ぎてないのに俺はキヨンになると言う宿命を与えられたのだった。

これからどうなることやら……………先が思いやられるぜ。

妖怪（前書き）

なんか感想もらつとやる気がめっちゃくちやでるw

妖怪

「文芸部がないですって!？」

放課後の教室で叫ぶ春宮。そんな大声出さなくても聞こえてるぜ。よく爺臭いと言われるが、まだ心は若者のつもりだ。

「知ってるわよ

まさかこんなところがSOS団完成を妨げるとは思わなかったわ…」

春宮には『残念だな』と哀愁を込めた声色で言っではいるが、正直俺はよろこんでいた。

まさか4月後半から巻き込ませて大変な思いをするとは思ってなかったからな。

これで少しでも活動を自重……または中止してくれれば言うことはないのだが…

「変わりになる部活を探しましょ」

俺の願いが粉碎されるのには数秒の時間しかかからなかった。

「文芸部がないならSOS団は作れないだろ、諦めろ」

……と諭してみたものの、当たり前のように無視された。そのまま猫のように首を捕まれ部室塔まで連れて行かれた……いや、連行された。

「まずはコンピ研ね」

春宮は俺が作った（作らされた）部活リストを片手に持ち、上機嫌でずるずる俺を引きずっている。

コンピ研と近所付き合いするのはなかなか魅力的だと思う。しかし、俺にはコンピ研は無理だと言う確信があった。
なぜなら…

「たのもー!!……………」

勢いよく扉を開けた春宮は絶句している。それもそうだ、目の前には30人を越える人数の部員がカタカタと渴いた音を奏でていた。少しなら聞いていて心地よい音もここまでくるとうるさいぜ。これがコンピ研が無理だと思う理由だ。何故かこの学校はコンピ研の規模がでかいんだよ。

一斉に俺達二人をみる部員。どうしたものかと冷や汗をかいている俺にどうやら部長らしき席に腰掛けてる人物が声をかけてきた。

「どうしたのお嬢さん達？」

妖艶な笑みを浮かべてるその女の子は身長は中学生ぐらいで髪をツインテールにしている。

うん、ツインテールは良い。心を清めてくれる……気がする。

「へえー貴方達どちらさん？
入部希望者？」

てくてくと歩く部長にそう聞かれた。
どう答えたものかと考えてると…

「あいにくだけど、こんな辛気臭くて根暗でネガティブな部活に入るつもりはないわ」

いきなり挑発的な態度をとる春宮。やめてくれ、部員どもの辛気臭くて根暗でネガティブな視線が痛いだろ。

「じゃあなんのために来たの？」

『パソコン一式、いただきにきましたー』とか言っちゃうわけ？」

軽く挑発を受け流した部長。

この部長はどうやらわかってたらしいな。涼宮ハルヒはコンピ研からパソコンを強奪してるから、涼宮ハルヒの真似をしている春宮なら間違いなく来ると。

この部長大物かもな。

「あら？わかってるじゃない
と言うわけで、ちょうだい」

こっちはこっちで全く悪びれもしない。こっちも大物か。

「もちろん答えは、い・や・だ」

貴女みたいな奇人に捧げられる可哀相なパソコンはこのコンピ研にはどこを探してもありません」

全く予想通りの反応だが、少し挑発的過ぎないか？

まあこんなわかりやすい挑発にのるほど春宮はわかりやすくはないだろうが…

「なんですって!？」

このまな板口リ娘!!」

キレた。

ものの見事に……。止めるのは俺の役目か。
それにこの状況で騒ぎなんて起こしたら悪者は間違いなく俺達だしな。

春宮を止めようと口を開きかけたその時、コンピ研部員達の表情が強張ってることに気づいた。

「おい………… お前なんつた？」

恐ろしく低い声だった。辺りを見回し声の主を探してみたが、全く見当たらない。

まさかとは思いつながら背の低い部長を試してみる。

俯いてなにかダークなオーラを纏っていた。ダークなオーラじゃよくわからない？

仕方ないだろ。その言葉がピッタリだったんだから。

「誰がロリ娘じゃあ！！」

部長までキレていた。

ここからは罵倒の嵐で俺が春宮を強制退出させるまでお互いの罵り合いが続いていた。

春宮いわく『アタシは自分より幼いやつに馬鹿にされるのが1番嫌いなもの』

部長いわく『あんのクソアマめ………… 誰がロリ娘じゃあああ！』

俺は部活リストのコンピ研に斜線を書き入れた。

妖怪 2

その後、俺はいろんな部活を回ったが、春宮は全ての部活で騒ぎを起こして俺が強制退去する、と言うことを繰り返した。

ついでに同好会も見て回ったが、長門有希のような人物が現実存在するはずはなく、春宮のイライラは増すばかりだった。

そして放課後の教室で

「ああもう！

なんで文芸部どころか乗っ取れそうな部活がないのよ！」

「乗っ取るってなんだよ

んなこと思ってたとしても口に出すな」

「仕方ないわ

作戦プランBに移行するわよ、慧」

ちなみに慧ってのは俺の名前だ。春宮は時々この名で呼ぶ。そして何故か俺をキヨンと呼ぶ。

その理由を春宮に聞いたところ『ほら、慧って漢字を分解したらキヨンになるじゃない』だそうだ。

意味わかんねっ！

「その作戦プランBとやらの説明よろしくお願いします」

黙っていたら勝手に話が進むからせめてなにが起こるかだけは聞いておこうか。

「よろしい、教えてしんぜよう
作戦プランBとは…」

そう言えば作戦プランAを知らないな……まあ大方想像はつくが。
「文芸部を作るわよ！」

「諦める」

だろうと思った。

涼宮ハルヒの憂鬱で、主人公がハルヒに吹き込んだことだ、『ない
なら作ればいい』

春宮はSOS団、文芸部共に作ろうとすることがわからないのはア
ホか白石だけだ。

しかし、うちの学校は部活には強制参加しないといけない。一年で
ある俺と春宮はまだ入っていないが、他のやつらはほとんど入っ
ているだろうよ。

それにお前に付き合っ
て部活作るやつなんかいないだろうよ。
……いや、今現在協力しているバカが一人いるか…

「なんでよ!?!」

「それは斯く斯く然々で…」

「そんな説明じゃわからないわよ!」

仕方ないく俺がわかりやすいと説明すると。

「大丈夫よ。条件をクリアしてる人ならいるし」

そんなやつがいるのか？

いてもろくなやつじゃないだろ？

だいたいお前みたいな変人と関わるわけないだろ。
ちつとは考えてだな…

「さっそく行くわよ！」

やっぱり聞いてねえ…。

妖怪 3

「希兎ー！！いる！？」

俺が強制連行された場所は、立入禁止されている屋上だった。

その立入禁止の場所で一人座って本を読んでいる女子生徒がいた。
俺は一目見て

「なるほど」と思ったね。

髪の色は黒いが、長さや背格好が長門有希そっくりだったのだ。
俺が言うんだ、間違いない……この発言はキモいな、自重しよう。
髪以外で唯一異なる点があるとすれば、眼鏡をかけてないことぐらいだ。

「……………いる」

希兎と呼ばれる生徒は本から目を離さずに言った。ここも長門らしいな。

「あんたいつも本読んでるでしょ？
文芸部作ってみたい！？」

春宮がさっそく交渉に乗り出した。

「……………わかった」

交渉成立までの時間わずか2秒。あっさり過ぎる。この子に意思はないのか。ひょっとして寝言？

「よし決定！」

細かいことはここの慧にやらせるから心配しないで」

つて俺がやるんかい。

部活作るってのは結構大きなことじゃないのか？

てゆーか作ったやつが部長になるんじゃないのか？

「ちよつと待て春宮

なんで俺が作らないといけないんだ」

「暇でしょ？」

「睡眠と言う時間の有効利用を…

「作りなさい！」

やはり拒否権はなかったようだ。

春宮はポケットから2回ほど折った紙を俺に押し付け

「次の団員を探して来るわね？」

と言に残して去って行った。

この娘の紹介ぐらいして行けよ。

どうしたものかと後ろを振り返ると、そこにはけだるそうに立っている人が一人。なんか様子がおかしい。

一瞬、誰かわからなかったが、この屋上には二人しか人間はいない

「あゝ、だるい。

部活作るのっているいろいろ書類だのなんだの用意しないといけないか

ら困るんだ。

それに顧問も見つけないといけないし……あー面倒
お前、本当に作るつもりなのか？」

「……………よくお喋りだことで」

「当たり前だろ？」

この社会の中でコミュニケーション能力0で生きていけると思っ
ているのか？」

首をこてんと傾げながら俺と向き合うのは先程の女子生徒そのもの
だったのだ。

あいつがいなかったら、こいつはこんなにもやる気がなくなるのか
……あいつからやる気を吸い取ってるのか？いいぞ、全部吸い取れ。

俺がやる気の無い春宮を妄想してる途中に女子生徒は言った。

「ああ、自己紹介が遅れたな

私は湯長希兎。こんなナリだが妖怪だ」

「えくすきゅーずみー」

「だから妖怪だ」

「ぱーどうん？」

「だ・か・ら、妖怪だと言ってるだろ」

「ここは日本だ。日本語でいいんだぜ？」

「……………はあ」

妖怪 3

長い沈黙。

ひたすら長い沈黙。

俺はなんと返せばいいかわからなかった。

湯長のほうは俺の返事をひたすら待っているようだ。

さてどうするか…

- 1 ・冗談だと思い、ノリ良く接する
- 2 ・馬鹿にする
- 3 ・真面目に聞き、本気で信じる
- 4 ・保留
- 5 ・逃げる

さて、どれを選ぶのか…

2と5は論外だな。普通は1を選ぶだろうが、そんなノリもテンションも持ち合わせていない俺には無理難題だ。

かと言って3を選んで、頭のネジがおかしいと思われるのは嫌だ。だから残るは…

「えー…と……………そ、そうか」

「信じてないな？」

「そりゃ……………ノーコメントで」

ナイフ持って襲ってくるやつから助けられれば信じるかも……………と続けようとしたが、万が一湯長が本物で、そんなやつに襲われる

のはごめんこうむりたいからな。

ノーコメントだったものの、俺は信じてないわけじゃなかった。かと言って信じてるわけでもないがな。

俺はまだ若くて、世の中を知らない。知らないから存在するかどうかはわからない。

わからないなら存在してもおかしくない……………かも。

「なら面倒だが証拠を見せてやるよ」

頭の裏をぼりぽりかきながら屋上から降りていく湯長。

俺になにを見せようと言うのだ。まさか朝倉もどきに襲わせるとかじゃないだろうな…。

ついて行こうと屋上のドアに手をかけたが……………開かない。

ドアノブはちゃんと回るから鍵をかけているわけではない。

まさか扉の向こうで湯長が抑えていて『見たか！これが妖怪の怪力だー！』とか言うのではないだろうか。

「おい、開ける！」

そう思って声をかけたが、全く反応が返ってこない。

と、その時……………扉にあるガラスが光を反射して鏡のような状態になり、俺は自分の後ろを一瞬だけみることができた。まあ見たくてみたわけじゃないが…。

普段ならこんなことは全く気にも止めないのだが…………

俺の後ろには、鮮血に染まった着物の女性が立っていたように見え

た。

慌てて振り返り、後ろを確認すると、そこにはただのフェンスしかなく、女性は何人か一人いなかった。
なんだ、気のせいかと思い前を向いた瞬間：

窓に移る女性が、俺の真後ろまで近づいていた。

妖怪

ほんの一瞬の出来事だった。

俺は直ぐさま横に飛びのき、距離をとる。

その直後、俺のいた場所には風の刃みたいなのが無数に現れ、風切り音になっていた。

その一瞬のうちに俺は考えた。

湯長が言っていたこと…

俺の身に今起こっていること…

俺を襲っている女のこと

涼宮ハルヒの憂鬱…

そして、春宮翡鈴。

そして悟った。

俺は涼宮ハルヒの憂鬱で言うキョン。この女は朝倉。湯長は長門、春宮はハルヒ。

つまり、俺は今朝倉に襲われてるキョン状態。

やばくなったところで湯長が助けに来るだろうか…

いや、現実はそのなにかもしいないかもしれない。自分ひとりでなんと

かすることを考えるんだ。

だが時間が足りない。今にも襲ってきそうな女に話を振って時間を稼ぐことにしよう。

「何物なんだ、お前は」

会話を試みたが、やはり取り合ってもらえず再び襲いかかってきた。慌てて俺は距離をとる。

なぜだが本能的に近づいてはいけないうような気がしたからだ。

案の定、俺の元いた場所は地面をえぐられて悲惨なことになっている。

再び俺の元に走って来る女。

だがその速度はあまり早くないせいかな簡単に逃げられる。

しばらくして俺は考えついた。

こいつの力でドアを壊せないだろうか？

やってみる価値はあるかもしれん。さつきから突進を繰り返す馬鹿女だから案外簡単にできる可能性があるからな。

よし…

「おら！こつちだ！」

手を振って挑発するような仕種を見せながら扉の前でやつを待つ。

女はゆっくり歩いて近づいてきた。何故走らない？

と考える余裕もなかった。

なぜなら後ろから現れた無数の手が俺をがっしりと掴んだからだ。

「なっ……離せっ!」

そう言っても離すことはなく、子供のように暴れる俺。

その隙に女は鎌鼬のようなものを俺に飛ばした。

やばい、逃げられない。

15歳と言う短い生涯を恨もうとしていたその時、後ろの扉が急に開いた。

俺はバランスを崩して後ろに倒れる。鎌鼬は目標を失い内側から風を吹き出しながら消えた。

「遅いぞ。なにやってんだ。」

どうやら扉を開いたのは湯長だったようだ。

今の口ぶりからして間違いなく助ける気はなかったようだな。

「お仲間だろ!早く倒せ!」

「は?なんのことだ?」

そうか。湯長はこいつが妖怪であることがわかってないのか。

「だからこいつは…」

口を開きかけたとき、再びあの女が鎌鼬を放っていた。それも湯長目掛けて。

「っ…くそっ……」

俺は半ば抱き着くように、湯長の腰にタツクルした。
万が一こいつの言っていたことが狂言だったら後味の悪いことになるからな。

「んっ？なんだこゝ……おわっ！」

マヌケな声をあげながら倒れる湯長。何故か頬が赤い気がするがそれどころじゃない。

「なに抱き着いてんだ！離せ！」

湯長はゲシゲシと遠慮なしに俺の頭を蹴っている。

この緊張感の無さはまさか本当にこいつは妖怪なのか？

「そんな無意味なことしなくてもこんなやつイチコロだ」

散々俺を蹴りまくった湯長はスカートを払いながら恐ろしく気軽な口調で言った。

「お前の身を案じてやったんだ」

「その台詞、もっとカッコイイやつに言われたかったな」

確かに俺がかっこよくないのは明白だが、不細工でもないだろう？人が気にしていることを言うなよ。見た目より男は中身で……（中略）……つまり男価値は………などと考えてた俺がふと我に帰ると湯長がトコトコと女に近づいているのが見えた。

「おい、危ないから離れろ！」

と、俺が口にした直後。

女はまるでバネに弾かれたように後方へ飛んだ……いや、ぶっ飛んだ。

俺の脳がなにが起きたかを理解する前に次のアクションが起こる。

女が無表情だった顔を苦痛に歪ませて叫びはじめた。

俺は恐ろしくなって後ろに下がる。

次に女は湯長を睨みつけて歪んだ笑みを浮かべた。そのときに口を曲げ過ぎたのか、口が裂けて耳辺りまで広がっているのがわかった。

だが湯長にはそれを気にする様子はなく、興味深そうにその様子を眺めていた。

やがて女が叫びながら湯長に突進しはじめた。ここまで来たらもう勝負はついたようなもんだ。

湯長は欠伸をしながら手を女へ突き出した。すると女は再び弾き飛ばされて地面に着地するまでには跡形もなく消えてしまった。

女を倒した湯長はけだるそうに振り返り

「このことも含めて話がある。

もうなにも言わずについてくるよな？」

もちろんですとも。

妖怪

「さて、なにから話そうか…」

湯長は自分でいれたお茶を啜りながらけだるそうに言う。

「何でもだるそうだな、お前は」

「ネットしてる時は元気ハツラツだけだなー」

俺はため息をついて辺りを見回す。

ここは湯長の部屋。原作の長門有希とは掛け離れたオタクチックな部屋だった。漫画、フィギュア、アニメDVDが綺麗に整頓されて並んでいる。

その中心にある四角い机に直面して座っている俺と湯長。

「じゃあ質問だ

お前は……………妖怪ってやつか？」

「ん？まあ、そうだな」

「妖怪ってどんなのだ？」

「人知では解明できない奇怪な現状または異様な物体……と広辞苑には書いてあった」

「まあさっきのこともあるし、信じてやってもいいが、なぜお前は

俺にこんなことを教えたんだ？」

「わかってるだろ？」

そう言っと、退屈になったのか、湯長は立ち上がってパソコンに向かいはじめた。

それはなんとなく予想はできてる。こんなシチュエーションはちょっと読んだやつなら直ぐに感づく。

だが、どうも心の奥底では納得できない俺がいる。

「認めたくない」

これが俺の正直な意見だ。

これからいろいろな苦勞を背負って高校生活を送るのは是非勘弁していただきたい。

「諦める。お前はキョンだ」

「役を誰かにパスは可能か？」

「不可能」

一言で切り捨てた湯長はパソコンをカタカタうちはじめた。
俺は大きなため息をついて

「お前の他に妖怪ってやつはどれぐらいいるんだ？」

「全くわからん。」

昨日までならいないって答えただろうけどな」

「と、言うことはだ。今日会ったあいつはお前の知らないやつなのか？」

「ああ、だからなぜお前を襲ったのかは不明だ。」

「ん？………ならなんでお前は楽勝だとわかったんだ？」

「そんなんわかるわけないだろ。
漫画の真似しただけだ」

こいつ、妖怪じゃなかったら俺は関わりはしなかっただろうな

「……ほかに俺に言うべきことは？」

「産まれてから15年、べつに作られたわけじゃないぞ。
後は………そうだな、妖怪だと気づいたのは今年の3月辺りだ」

「ちょっと待て、『気づいた』ってどうゆうことだ？」

「言葉通りだ。気づいたんだよ。」

3月の………何日だっけ？

まあいい。3月辺りに、突然『私は妖怪だ』って気づいたんだ」

「産まれつき妖怪で、両親から『実はお前は………妖怪なんだ』って
言われたんじゃないかってか？」

ああ。と短い返事。

長い沈黙の後

「他に聞きたいことがあったらその時間いてくれ
いきなりこんな話されても頭がついて来ないだろうしな」

「そうさせて貰おう」

俺は立ち上がり帰ろうとした時、ふとひとつ疑問が浮かんだ。

「なんでお前は春宮の前では長門のようなキャラなんだ？」

湯長は得に考えることはなく

「あいつがそう望んでいるらしいからな。希望通りにしてやってるんだよ」

やれやれと首を振りながら答える。

苦笑いとともにそうかい、と言って俺は湯長の部屋を後にした。

湯長にいろいろ証明された電波話を聞いた次の日。
学校について教室のドアを開け、席についた瞬間…

「大ニュースよ！

文芸部があつたわ！」

年中元氣ハツラツな春宮が話かけてきた。朝ぐらいはほつといいほしいね。

「なにを言ってるんだ。リストに乗ってないだろ？」

俺が作った部活リストには文芸部は書いてなかったはずだ。

「バカ！アンタが見つけれなかっただけでないって決めつけるんじゃないわよ！」

手伝ってやったやつをバカ呼ばわりすんな。

「ったく……それにしても希兎は役に立つわね。どっかの誰かさんと違って『……あつた』って言いながら文芸部につれて行ってくれたんだもん」

今の春宮の話を聞いて俺は確信した。たぶん湯長が元からあつたように細工したんだな。

あいつがどんな能力があるかわからんが、たぶんそんぐらいできるだろ。

「そうかい。俺としては仕事が減ったから喜ばしい限りだ」

「それで、SOS団の新たな団員を発掘する良い企画を思いついたわよ！」

どこから突っ込めばいいんだ？

「SOS団ってなんだよ」

俺の質問に、春宮は待っていたと言わんばかりに声を張り上げ

「私たちの団よ！」

と言った。

クラスメートの視線が痛い。

「じゃあ良い企画ってのはなんだ？」

「ふふん、それはねえ……」

春宮は俺の耳元で内緒話でもするかのように話す。べつに知られても困ることじゃないだろうに。

「どう！？」

いいアイデアでしょ？

さあ、今日の昼、実行よ！」

魔法使い（前書き）

新章突入！

魔法使い

恐ろしいことに春宮の作戦は実行に移された。

生徒への連絡よつの音あるだろ？

あれなんて名前だ？

まあいい

その日の昼その音が校舎全体に鳴り響いた。

「えー、皆さん。

本日はおひがらもよく……って違う！

今日は私達を作る（予定の）団、SOS団に入ってくれる部員を募集するわ！

募集条件は次の二つどちらかをクリアすればいいわ

一つは、不思議な体験をしたことがあるまたは近々不思議な体験をする

もう一つは私を楽しませる

以上の二つよ、どう？簡単でしょ？

参加したいと思うものは今日の放課後、文芸部室に来なさい、以上
」

……一緒に昼飯を食ってる白石と木田の視線が痛い。穴が空くからこっちみんな。

「お前、春宮となにたくらんでるんだ？」

先程の会話から俺が一枚噛んでいることは明白である。いや、本当は巻き込まれているだけなのだが、そんなことはわからないだろう。俺は急いで弁当を食ってから視線レーザーから逃げることにした。

「なんもたくらんでない
春宮の独断だ」

「それにしても面白そうなことするんだね」

木田が平然とした口調で言った。こいつは中学時代から並大抵のことでは驚いたり騒ぎ立てたりしないからいいやつだ。
むしろ楽しんでるように見えるぜ。

「俺は面白そうだとは思わないがな
グダグダになるのは間違いないだろ」

俺は弁当の最後の一品卵焼きを口にほური込むとすぐに教室を出た。
放課後には間違いなく面倒なことになる。
今のうちに休んでおくとするか。

魔法使い（前書き）

こちらへんは個人的に書いてて楽しかったw

魔法使い

放課後。

文芸部室に並んだ長蛇の列。

この暇人達はなにが楽しくてこんなところに来るんだろうか。

ん？俺か？俺は『来ないと死刑』らしいから仕方なく来たわけだ。

列の先頭に割り込んで部室に入ると入口に向けて机が3つ並べてあった。面接でもするのかよ。

「遅い

「すまん」

短い挨拶をすませると俺は右側の席につく。

湯長は既に左側に座って本を読んでいた。

「さあ、今から面接をはじめるわよ

あんた達は一人10点、私は80点で100点満点で点数つけるわ」

ほとんどお前の独断じゃねえか。まあ俺達に判断しろって言われるのも困るがな。

「さあ、最初の人。入って。」

募集条件は

1、不思議な体験をした

2、春宮を楽しませる

だったが、不思議な体験をしたことがあるなんてやつはいないだろうから皆は春宮を楽しませることになる。

しかしこいつはどうやったらかリアさせるんだ？

「組○番、××です
よろしく願います」

ノックをして入って来たのは長身で整った顔の絵に描いたようなイケメンだった。

「失格！」

いきなり春宮が言い出した。
呆然とする俺とイケメン。

「ちょっと待て、いくらなんでも早過ぎじゃないか？」

「こんな普通の入り方するやつなんて興味ないの！
とにかく普通じゃないやつがいいのよ！」

相変わらず、訳のわからないことを言うやつだ。

イケメン君が残念そうに退室すると次の人が入ってきた。

「ういゝす、真打ち登場！
呼ばれて飛び出てジャジャジャーン！」

誰だっけ？
もとい白石。

「失格!!」

「ええ、どうして!?
完璧な登場だっただろ?」

「登場がつまらないわ
それにあんたはただの普通の高校生。見てたらわかるわ」

まあ確かにこいつがいつもの言動は少しハイテンションになったところの高校生と変わらないだろう。

だが春宮の評価は酷くないか?

最初のやつがダメだったから必死こいて登場を考え、痛いのも我慢して飛び込んできたんだ。

少し白石に同情したのは俺だけではあるまい。

「ちょっと待てよ。この為に考えたネタがあるんだ。それを見てからでも遅くないだろ?」

「わかったわ

10秒でやりなさい」

短っ!

案の定、焦った白石のギャグ(?)は噛みまくりの失敗に終わった。肩を落として退室する白石の背中には寂しそうだった。

その後の審査も酷いもので、俺と湯長が点数をつけたのは2、3回しかなかった。それにその2、3人も春宮が0点にしたから赤点で失格だ。

このまま全員失格で終わると思っていた。
しかし途中に入ってきた女子生徒はその予想を覆した。

魔法使い

「よろしくお願いします」

綺麗に会釈した女子生徒は完璧な容姿と言っても過言ではなかった。身長は春宮と同じかそれ以上。顔も春宮、湯長に劣らない大人っぽい顔立ちだった。さらに春宮以上にグラマーな身体。

そして柔らかい笑顔。髪は肩にかかるか否かぐらいだ。

そこの男どもならころつと落とされてしまいそうな容姿だった。

春宮も気になったのか、すぐに失格と言い渡さずに見てみるつもりらしい。

「では、はじめます」

柔らかに微笑んだ女子生徒はハンカチを取り出して見せた。

「実は私、魔法使いなんです

魔法の杖ぐらいなら何処からでも取り出して見せることができます。

」

女子生徒はハンカチを広げ、なにもないことを見せたらそれを右手に拳を作って押し込んだ。

そのまま拳に左手を入れるとスルスルと長い棒が出てきた。

おお…と関心する俺と春宮。
すると…

「キョン、後ろに回って見なさい」

春宮は見破ってやろうと火がつき、俺は後ろから女子生徒の演技を眺めることとなった。

女子生徒は杖を春宮に渡し

「プレゼントです」

とニツコリ微笑んだ。中に飴でも入っているのだろうか。

「このに一組のトランプがあります。」

では春宮さん、このカードをよくシャッフルしてもらえますか？」

差し出されたカードをショットガンシャッフルする春宮。

一回では物足りないのか何回も何回もしてトランプを女子生徒に返した。

「ではこのよく切ってもらったカードの中から一枚選んで貰えますか？」

春宮にカードを広げて見せる女子生徒。

春宮は一枚のカードを選んで手渡した。

引いたカードはスペードのAで覚えやすいカードだったらしい。後で聞いた話だが。

それを混ぜた女子生徒は適当に切り混ぜてカードを右手で持ち視線をカードに視線を集中させた。

「では、参ります」

女子生徒はおもむろにトランプを空中に放り投げる。カードが横の黒板に勢いよくたたき付けられる。トランプは散らばりばらと地面に落ちていった。俺も投げてみたい気がするな、スツキリしそ
うだ。

全てのカードが落ちると黒板には3枚のカードが張り付いていた。
そのカードを見せられた春宮はまだ驚かなかった。

そこにはクローバー、ダイヤ、ハートのAが張り付いていた。

「こんぐらいじゃアタシは満足しないわよ？」

「いえ、まだ続きます。」

スペードのA、どこに行ったかご存知ですか？」

「いや、全く」

問い掛けられた俺は答えることはできずにあたりに散らばったカードに目を走らせた。

「実はカードは自分を引いてくれた人の元に帰ろうとする性質があります。」

今空中に放たれたカードは誰にもばれないように春宮さんの元に戻ったのです」

女子生徒が笑みを浮かべながら春宮を見る。

春宮は慌てたようにポケットを探ると中にあったカードを取り出した。

その表情は微妙に強張っている。

「すっごいわ、貴女！」

採用決定よ！」

カードを見た春宮はすぐに笑顔になって叫んだ。
「どうやらスピードのAだったようだ。」

魔法使い（後書き）

ちなみに新キャラがやってたマジックは実際にできますw

魔法使い

その後、春宮は集まった残りのやつらを追い返し、部室に帰ってきた。集まったやつら、ご愁傷様。

「さて紹介するわ

これが湯長希兎、SOS団の無口キャラなの。あとその他ね」

「言えよ名前！

湯長より文字数少ないだろ！？」

くすくすと笑う女子生徒はそのまま会釈をすると自己紹介をした。

「これからよろしくお願いします。恋月 いずみ と申します。

身長は162センチ、体重はヒミツです」

スリーサイズは上から……」

「誰もそこまで聞いとらんっ！」

「あら慧、知りたくないの？」

「知ってどうする」

その後、俺達のやり取りを聞いていた恋月は思い出したように言った。

「あ、魔法使いと言いましたが、あれは単なる手品の語り句ですか

らね？」

そんな言いわけなくてもわかる……と言いたかったが、この世の中、妖怪がいるくらいだから実は疑ってた。

本当に魔法使いなんじゃないか、とな。

その後、恋月がバイトがあるとかでお開きとなった。

春宮は自分の荷物を持つと歓迎会がなんとか言いながら部室を後にした。歓迎会くらいなら労力も少ないだろうから構わないか。

湯長も読んでいた本を閉じて立ち上がる。

そのまま歩いて部室を出る。俺の後ろを通り過ぎるときに『気をつけろよ』と言いなから手をひらひらさせた。嫌な予感がする。

ま、気にしたって仕方ないし、帰るとするか。

俺が席を立ち上がった時だった。

「慧君。いつも暇人でしょう？
付き合ってもらいたいんですが……」

「ちょっと待て、バイトはどうした？」

「嘘ですよ」

あっさり言っただけやがった。
なんでこいつは嘘ついたんだ？

いや、それ以前に『いつも暇人』ってなんだ、これでも俺は……
まあ暇だな。

「まあ断る理由はないから構わないぜ」

「じゃあ荷物をお願いします」

と言いながら荷物をパスされた。

「あ、ああ……わかった」

遠慮なしに頼んでくるので断り切れずに荷物を持つ俺。情けない。
この1分足らずでの俺の恋姫への印象は、礼儀正しいが遠慮がない。
まあ荷物持ちぐらいなら男としてやって当然か。

「ではついて来てください」

へいへい。

魔法使い

「なにを待ってるんだ？」

タクシーか？」

俺達は学校前のベンチで座って時間を潰していた。
ここに来てからから30分近く待っているのだが、なんの音沙汰もないのは何故だ。

俺の心境としては早くこの場から離れたかった。

さつきから通り過ぎる男子生徒の嫉妬の目と、女子生徒の哀れみの目が辛い。

何故俺がこんな目を向けられているかと言うと、言うまでもなく恋姫のせいだ。

ぶっちゃけ恋姫は可愛い。性格は知らんが他は全て完璧だろう。

故に俺がいつしよに肩を並べて座っているのは場違いってやつだ。

「ええ……さつき電話したはずなんですけど……。もう一度してみますね？」

と、恋姫が携帯を取り出し電話した時、不意に俺達の背後の茂みから電話の着信音らしき音が聞こえ、その後に焦ったような声で『やばっ、マナーモードにするの忘れてた！』と聞こえた。

「…………お姉様？」

恋姫がニコニコ微笑みながら言う。しかし目は笑ってない。無茶苦茶怖い。

「あちゃー……ばれちゃったか…」

頭をぼりぼりかきながら茂みの中から姿を表した、恋姫の姉らしき女性は、女性と言いつのを躊躇うくらい女性らしくなかった。本当に姉妹なのか？

見た目は大学生ほど、髪は長く伸ばしてあり結んでいない。スタイルは恋姫を上回るほどの身体付きで、確かに女性ではあるのだが…。

「いつから見えてたんです？」

「ほんの30分前から。」

でもあんた達見てて楽しくなかったわ。」

恋姫の恐怖の微笑みを軽く受け流す姉らしき人物は、何故かジャージを着ている。それだけでせつかくの魅力ががた落ちだ。

「なら早く出てきてください」

「ほいほい」

恋姫姉はその後、茂みにがさがさ入っていき、数分後にタクシーに乗って登場した。

「待たせてすみません。
では乗ってください。」

俺はタバコ臭い車内に素直に乗り込んだ。

魔法使い（前書き）

週1で大量に更新に変えようかな

魔法使い

乗り込んでから窓の外を見て電柱の数を数えていた俺に恋姫姉は話かけてきた。

「少年よ、こんなに可愛いはずみちゃんと一緒に待っているのに、面白い小話一つでもして仲良くなるうとか思わないのか？」

…… あんたはそんなことさせようと30分も茂みに隠れていたのか。俺に面白い話を期待しても無駄に決まっている。

生まれてこの方、俺の口で女の子を笑わせたことなんてあったか？ いいや、ない。あつたかも知れんが忘れた。

どうも女と話すのは苦手だ。趣味とかが合わないからな。

「仲良くなりたいとは思いますが、あいにく俺は『草食系男子』って言うやつなんですよ

真面目に二人で対談させられたらなにを話せばいいかさっぱりわかりません。

『ご趣味は？』とでも聞けばいいんすか？」

恥ずかしがり屋どうしのお見合いになっちまう。

「あら？」

私の趣味が聞きたいのですか？」

「別に聞きたいわけじゃないが、一応聞こうか」

「私の趣味は

「おい少年。先ずはお姉さんの名前を聞いて挨拶するのが先じゃないのか？」

せつかく盛り上がってきた会話を潰しやがったコノヤロウ。

「……貴女の名前は？」

「人に名前を尋ねる時は先ずは自分からだろう？」

……。

「慧です。涼宮慧。」

「私は恋姫麗。
名前で呼ぶなよ」

「じゃあなんと呼べばいいんですか？」

「私をいずみちゃんと呼んでください。そしてお姉さまを恋姫とお呼びになってください」

「じゃあお姉さんと恋姫にしますね」

だんだんと恋姫のキャラがわかってきたのでスルーすることにした。同級生、それに間違いなく美人に分類される女子を名前呼びするのは抵抗がある。変な噂がたったら困るのは恋姫だしな。

スルーされた恋姫はと言うと『お姉さん……おねえさん……お義姉さん……それもいいですね』などと言っている。どんな漢字を当て嵌めるのやら。

「そろそろ到着だぞ、いずみ」

そう言うと姉はいきなりハンドルを激しく捻った。同時にブレーキも踏んでいたらしく、車はドリフトしながら縦列に止まっている車の間に滑り込んだ。

「あ、危ねっ！」

慣性の法則により恋姫が俺の元に倒れてくる。できるだけ優しく受け止めるがなにやら柔らかいものが腹辺りに当たっている気がするが飽くまで俺は平静を装って恋姫を起き上がらせようと肩を押す……が、見えない力が働いて恋姫が離れない。と、思ったらこいつが腕を俺の腰に回しているだけだった。

「……なにがしたい」

「怖かったです」

「嘘つけ。』はなんだ』は」

「おいお前ら私の前でイチヤイチヤするな。

元カレ思い出して悲しくなるだろ。独り身のお姉さんに見せ付けて楽しいのか？」

「誰のせいだ！」

俺はやつとのことで恋姫を引き離してドアを開けて外に出る。

そこはただの街だった。

どうやら大型百貨店の前の大通りらしく、縦列駐車していた車は全

てタクシーだったようだ。

まだ車内に残っている二人がひそひそ会話しているのがわかるが得に聞き耳も立てずに背伸びををして筋肉を解す。

そういえば金は払わなくてよかったんだよな…。

そんな心配は杞憂に終わり、車内から出てきた恋姫に手を引かれて歩き出した。

「では行きましょう

目的地はその信号です」

「信号？」

信号が目的地なのか？

それはないだろ。

だが恋姫は俺の手を引いて歩き続ける。
信号に差し掛かった辺りで

「15秒ほど目を閉じていてください」

と言われたので目を閉じて恋姫に引かれる方向へとついて行く。

俺の体内時計で10秒経ったあたりで立ち止まった。

「はい、チーズ」

と言う声と共にシャッター音が聞こえた。
こいつ写メとりやがったな。

「おい、なにしてん……だ？」

魔法使い（前書き）

毎週日曜日に更新します。

魔法使い

慌てて目を開けた俺は絶句した。もう写メなんかミジンコ程にどうでも良くなったからだ。

涼宮ハルヒの憂鬱を読んでいるであろう読者の皆さんはお分かりだろうか、予想通り、俺は閉鎖空間にいた。開いた口が塞がらない。本当にドーム状の球体の中にいるようだ。振り返って今来た道に手を伸ばすが見えざる壁に阻まれる感覚がして気味が悪い。

俺が感慨深い思いをしていると恋姫が振り返り言った。

「主人公になった気分はどうですか、キョン君？」

「…………お前もそんな事言うのか。
言うておくが、今はこんな役割を望んでないぞ」

「もう役割は割り振られていますから、仕方ないでしょう？」

俺はため息をついて辺りを見回す。今に始まったことじゃないだろう俺。

周りの物体が色あせ、灰色に変わって君が悪いな、ここは。

「ここは何処なんだ？閉鎖空間か？」

「『閉鎖空間』…………だとパクリになってしまっているので『クローズド・スペース』とでもしましょうか」

直訳で『閉鎖空間』じゃねえか。それに今更パクリと言わなくても舞台は涼宮ハルヒの憂鬱のまんまじゃないか。

恋姫はこの空間『クローズド・スペース』に慣れているのか、公園を散歩をしているような気楽さで歩き出した。どうしたらいいかわからない俺は後ろについて歩く。

その間は全く会話がなかった。ア然として会話する気分になれなかったからだ。何故なら俺の脳内は、これから衝撃的なトラウマを植え付けられる気がしてならなかったからだ。

暫くすると恋姫は後ろ向きで歩きながら話かけてきた。

「古泉一樹……。懂れますよね。」

何処にでもある変哲もないビルを眺めて意味深に言った。
いきなり何を言い出すんだ。こいつは。

「そりゃキモカツコイイし頭も良い。運動もそれなりにできれば、人当たりも良い。好印象を持たないやつはほとんどいないだろうよ。」

恋姫がそのままビルとビルとの間の裏道に入って行ったので俺もついて入る。

「そう言うわけではないんですけどね……」

裏にあつた屋上へ直に繋がっている非常階段を登りはじめ、苦笑いを浮かべながら振り返る恋姫。俺は何か間違つた捉えか方をしたか？

恋姫はやれやれと言った感じで首を振ると言った。

「お分かりだと思いますが、ここは春宮さんのイライラが頂点に達した時に産まれる場所です
その他もろもろも閉鎖空間と同じだと思って構いません。ある一点を除いては」

意味深な言い方をする恋姫は少し楽しそうだ。いや正確にはなにかを楽しみにしているような感じだな。

長い長い螺旋階段を上り終えた俺達はビルの屋上ベンチに座り、休んでいた。

「今から言う忠告は絶対守ってくださいね？」

ここから離れてはいけません

何が近づいてきてもです」

「ああ、そりやわかったが、何故なんだ？」

「それはそのうちわかります

では行ってまいります」

と、言うとき恋姫は手を振った。そうしたらいつの間にか手には箒が握られていた。

一瞬の出来事に俺は驚くことすらなかった。

恋姫が手を離すと、落下するかと思われた箒は膝下辺りで浮遊し続けていた。

恋姫は箒に腰掛けると指を鳴らす。すると箒はワイヤーに吊されて

いるかのような動きでスイスイ飛んでいった。

……魔法使いだな。

リアクションの取り方がわからなかったぜ。

魔法使い（前書き）

テスト勉強と両立はしんどい…

魔法使い

そういえば、まだ神人は出ていないのに出勤するのか？

等と考えていた俺の目の前で信じられない光景が繰り広げられた。

いきなり恋姫がビルに突っ込んだと思ったらそのまま何個ものビルを貫通して突き進んでいる。

あいつ……ボタンの操作でもミスったのか？

しかし俺の予想は大きく外れることとなった。

他の魔女が現れた。

少し歳を取った本物みたいな魔女と黒髪ジャージの魔女だ。

魔女達は杖を振ってそこから炎の玉を飛ばして建物を破壊している。さっぱりわからない。

まさかこの魔女達が神人？なんて馬鹿げたことを考えていると、魔女達の下の地面から何か水のような物体が盛り上がって来た。

「来たか……神人」

いきなり生まれてきた神人は予想以上に大きく怖い。

神人は仁王立ちの状態になるとそのまま魔女達へと太い腕を振るった。

あっさりよけた魔女達は赤子の手を捻るように、炎の玉を飛ばして神人を蒸発させた。

戦力差がありすぎる気もするが、そのほうが世界は平和だからいいだろう。

神人が倒れた後も恋姫達は破壊活動が続いている。まさか崩壊するんならいくら壊しても大丈夫だからストレス発散とでも言いたいのか？

そこまで考えてた時、不意にビルの下から青白い光が輝きはじめた。非常に嫌な予感がする。

俺の前の光の源の水みたいな人型をしたものが立ち上がった。

やばい。逃げよう。

恋姫は動くなと言っていたがこんな近くで襲われたら間違いなくタヒぬ。

俺は屋上のドアを開けると直ぐさま階段を駆け降りた。

神人はまだ覚醒してないのか動く気配がない。よし、今の内に…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7099h/>

春宮ヒスズの憂鬱

2010年10月8日11時19分発行